

I-G403-1 妊娠・産褥ラットの脂肪組織におけるレジスチン遺伝子の発現について

三重大学医学部付属病院産科婦人科<sup>1</sup>、三重大学産科婦人科学講座<sup>2</sup>

近藤 英司<sup>1</sup>、杉山 隆<sup>1</sup>、日下 秀人<sup>2</sup>、豊田 長康<sup>2</sup>

【目的】脂肪細胞から分泌されるレジスチンはインスリン抵抗性に関連することが示されたが、現時点でquestionableである。妊娠末期においてインスリン抵抗性が増大することは知られているが、その詳細な機序については解明されていない。今回我々は妊娠ラットの脂肪組織におけるレジスチン遺伝子の発現を検討した。【方法】Sprague Dawleyラットを用いて妊娠5、10、15、20日で腹腔内脂肪を採取し、その一部よりAGPC法によりtotal RNAを抽出し、RNase protection assay (RPA) 法にてレジスチンのmRNA量を定量した。【成績】妊娠時では、妊娠経過に伴いその遺伝子発現は増加の傾向を示した。【結論】妊娠末期におけるインスリン抵抗性の原因の一つとして腹腔内脂肪組織のレジスチンの発現が関与している可能性が示唆された。